（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（地球環境学）	氏名	中　野　　文　彦
論文題目	１８世紀岡山藩の文明化 ― 再生可能エネルギー社会の駆動と制御 ―		

（論文内容の要旨）

本論文は、18世紀中期の岡山藩における文明化過程について、燃料エネルギー循環の把握を基礎に据えた統合的理解を提示する。その手法は、１）まず領内の燃料エネルギー循環について、文書史料だけに頼ることなく、産業用消費燃料と家庭用消費燃料の比率を当時の産業連関を措定して算出、後者が約86％にも及ぶことを明らかにし、２）そのうちの大部分を占めた食事用煮炊きエネルギーの実量については、人口が総体として安定推移したという事実ならびに当時の各種炊事具が持ちえた平均的熱効率をいわば２大条件にして、領内諸層の健康体重維持に必要な食物消費量とその炊事エネルギー量を試算、統計的に使用可能な数値を出した。３）そして、それらのデータをふまえ、岡山藩社会を約半世紀にわたり安定をさせえた他の諸力の相互作用を、物理条件と精神条件の両面から考察するというものである。

結果として、同藩社会の安定は、燃料需給の均衡をかろうじて保ちながら、なお閉塞することなく、文をなし明かるさを発揮する傾向、すなわち文明化の様相をも示しえたことを明らかにし、その仕組みについて独自の論を展開した。

本論は全体で６編から成る。第Ｉ編は研究目的を、第Ⅱ編は研究対象の基礎データを、第Ⅲ編は文明化の基礎をなした物理的制約を、第Ⅳ、Ｖ編は文明化にかたちを与えた精神的制動の緩急を、それぞれ論述、第Ⅵ編でまとめと考察を行う。なお、補足資料26点、試算資料10点、地図１点を付す。各編要旨は次の通りである。

第Ｉ編では、低エントロピー社会への現代的関心から18世紀岡山藩が注目に値することを論じ、文明化を進めた駆動力やそれを制約する諸条件の統合的な捉え方を提起し、基本用語の定義を行う。第Ⅱ編では、岡山藩の概要を把握するため、地勢、気候、町在の家屋構造、災害、人口、戸数、平均家族員数などを明らかにし、第Ⅲ編では、土地利用の詳細、とくに課税対象面積に対して実耕作面積がその１．３倍以上もあったことを明らかにし、また上記の手法で、産業用ならびに家庭用燃料の需給の実態を統計的に提示、第Ⅳ、Ｖ編では、精神面での諸条件考察のため、まず、藩の倹約令、教化策を中心とした諸階層分限意識の維持体制を明らかにし、そのうえで士庶の芸能慰楽の実態を、関連法令と名主層に伝存する文物ならびに同時代に領内を通過した旅行者の記録などの検討により解明した。

最後に第Ⅵ編では、岡山藩の安定化ならびに文明化の持続は、物理的ならびに精神的諸制約のはたらきが、年貢負荷を免れた土地が大きく存在したことを背景に、時に緩やかでもありえたことによるものであると論じるとともに、そのような制御体制は商品経済の浸透が起こしていた藩社会の流動化に対しても機能しつづけていたものの、1780年代以降の気候変動で、揺らぎの振幅を増さざるをえないところに至ったことに注目、18世紀中期岡山藩経営が深層で孕んでいた困難を確認することで、その文

明化過程の質を考察、あわせて現代社会の文明化への示唆を論じて、結んでいる。

（論文審査の結果の要旨）

岡山藩は、これまで、いわゆる近代化に関心を寄せがちであった近世日本研究の歴史のなかでは、領地規模の大きさにもかかわらず、地方史分野以外から注目されることは比較的少なかった。いわゆる西南雄藩と異なり、藩政改革にも明治維新期の政治運動にも目立った事蹟を残さなかったことが影響しているのであろう。しかし、地球規模での社会安定化と持続、さらにそれが閉塞せずに文彩光明を保つことが求められている現代世界にあって、独自の安定を保持しえた岡山藩に対してはあらたな関心が生まれてよい。

本研究は、同藩の以下のような特質に光をあて、その仕組みの解明を企図したものである。すなわち、人口の安定、「備前風」と呼ばれた消費規制と教化理念の浸透、一揆や争乱の出現とそれに対しての武力発動という事態の稀少、士庶にまたがる貧困の恒常化にもかかわらず閉塞よりも文明化の様相が確認しうること、そしてそれらの特質が循環可能な太陽エネルギーに依存して維持されたことである。つまり、小規模ながら、現代世界の課題に応じて検討に値する人類の体験の事例であるとの判断のもとに進められた研究であることが、まず評価される。

とくに、燃料の生産と消費の全容解明にむけて、文書記録に頼るこれまでの歴史研究ではなしえなかった、産業連関を想定した上でのエネルギー循環系の提示と現代家政科学の知見をも参照した燃料財の需給試算法の開発とそれを用いての可能な限りの推定統計値の算出は、近似の域にとどまるものの、独自の学術的寄与であると認めうる。また、その結果として、物理的な社会制動要因として、これまで素朴に想定されがちであった食料消費可能量よりも、燃料消費可能量こそが決定的な意味を持ったとの発見があったことは注目に値する。このような統計仮設法、すなわち、かぎられた史料や明治以降の近代統計の数値からの類推にも助けられながらの試算と推論から、近代統計に近いものを措定して考察する方法に対しては、精密な実証史学の立場からの批判もあろうが、ある時期のひとつの統治体の安定をとらえ、その文明化の質を考えようとの強い関心のもとに、あえてこのような試みに挑んだ努力をたたえたい。

この研究過程で、明らかになったことのなかでは、文明史の観点から、さらに以下の２点が重要と言える。すなわち第１に、岡山藩の人口動態、食料と燃料の需給、産業用燃料と家庭用燃料の藩内消費構成比を数値で統合的に明らかにしえたこと、第２に、近世の藩政史料からは見えにくい次元で、藩社会の二重構造的な展開の仕組みが機能していたことが、本研究の方法で顕著に浮かび上がったことである。藩政史料の中心をなすのは、あくまで身分規定、年貢徴収、貨幣出入に関わるものであり、それらが語るのは慢性財政難状態からの圧迫を蒙る多数の藩士と領民の世界である。しかし、そこには語られない別世界、すなわち実耕作面積を基盤とした、一定の自治により生活を維持し展開しえていた人びとの世界が、本研究により、さらに鮮明に見えだしたといえる。この二重構造が文明化の維持に寄与していたとの考えは、他の社会の統治研究にも参照されうるものであり、理論化の可能性も含めて、評価される。

なお、本研究では、岡山藩というものをいわば文明化の単位としてとりあげようとしたが、その領分の中ですべてが完結していたわけではない。塩および米の藩外移出、製塩用相当量の薪の藩外からの移入、鉄の藩外からの移入、他の物資の大坂市場との関わりと貨幣流通などは、むしろ議論の中に取り込んで展開されることが適切であり、その意味で、この文明化過程の研究は、さらに重層化され豊かに展開されうる余地が残されている。ただし、そのことも含めて、現時点でこのような展望がひらけたことについては、本研究の短所というよりも達成として評価したい。他方、このような文明化の単位の議論がなされるにあたり、それといわば並行するかたちで、ひとつの流域、ひとつの郷村、そこに生活を展開する一名主家、あるいは城下の一商家といったまとまりを対象にした個別研究が進められることが望まれる。

また、本論文は、精神的制御条件に関しては、物理的制御条件の場合とはことなり、計量化による分析をしていない。しかし、たとえば、本論文が重視した教化策や倹約令に対して文明史的関心を向けていることは重要であり、それらが四民の消費行動に形を与えたことから、何らかの計量化分析法の開発は可能であると考えられる。

中野文彦氏の論文は、環境史を文明化の視点でとらえようとする新しい試みであり、調査研究活動が多方面にまたがる点では大きな努力を自らに課すものであった。その成果を審査する「地球文明論」分野での学位請求論文の条件のひとつに、専門分野を超えて通じうる文体の工夫がなされていることという条件がある。この点については、中野氏の努力は一定の成果をあげたと評したい。

環境研究にかかわる学術分野は多種多様であるが、地球環境学というひとまとまりの領域への統合は、未完の課題である。その統合過程に求められるのは、単なる地球規模の人間活動抑制や環境保全にとどまらず、全体としての文明化である。その意味で、地球文明論分野で本論文が提出された意義は重く、将来、適切な編集作業をへて、一般読者層に語りかける出版がなされるなら、一層の社会貢献となるだろう。

以上、本研究は、地球文明論分野の開拓に努め、上記のような学術的貢献をなした。よって本論文は博士（地球環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また、平成23年１月７日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降